新しい長浜市ってどんなまち ③地域文化編

新しい地域文化が育まれるまちへ

1市6町には、全国に誇れる多くの歴史・文化的遺産とともに、この地で暮らしてきた住民のみなさんが長年培ってこられた生活文化や地場産業などの貴重な地域資源が今なお数多く残されています。

新市では、そういった貴重な地域資源を大切にしながら、新しい地域文化が育まれるまちづくりをめざしていきます。

地域再発見

新しい地域文化を育んでいくには、まず、地域にある資源を知ることが大切です。

しかし、それらは近くにあればあるほど、その素晴らしさに気がつかないことがよくあります。1市6町には、地域の住民のみなさんが大切に守り育ててこられた地域資源が、今なお数多く残されています。

今回はそれらの一部を紹介しますので、まずはそれぞれの地域にある素晴らしい地域資源を知ることから始めていきましょう。

▶井戸からくみ上げた水の中から籾を探す当番のみなさん

夏 水替え盆（虎姫町）

三川の玉泉寺にある元三大師が産湯を使ったと伝えられる井戸では、毎年8月7日、くじで選ばれた当番が浄衣に身を包み、井戸の水をくみ出す行事が行われています。その時に井戸の底から浮き上がってくる籾の数などで1年の豊凶が占われます。

また、くみ出した水を掛けられた人は、1年間無病息災で過ごせると言われています。

夏 花笠踊り（西浅井町）

ちゃんちゃこ踊りとも呼ばれる花笠踊りは、毎年8月16日、下塩津神社の例大祭で奉納されます。花笠踊りと呼ばれるのは、側踊が花笠をかぶることによりますが、なぜ、ちゃんちゃこ踊りと呼ばれるのかは不明です。

また、この踊りは三つの部分から成り立っており、氏子の若衆が組織する実行委員会が何百年来、継承しているものです。なかでも一番古い踊りは花笠で、これは平安時代の女官の外出姿から転化したものだと言われています。

▲数百年間、集福寺に伝わるちゃんちゃこ踊り

秋 八朔大祭（湖北町）

速水の伊豆神社で毎年9月1日に行われるお祭りで、特に、神社の式年や国の祝典等にあわせて奉納される「青物神輿」は、野菜・果物などを細工し造られる「造り神輿」で、清楚さと荘厳さを兼ね備えています。

また、昨年は、地元のみなさんの力で、昔、お祝い事などで行われていた「幡母衣武者行列」が20年ぶりに行われ、地域に活気があふれました。

▶幡母衣武者行列

▼青物御輿

TOPICS

冬 嫁オコナイ（高月町）

磯野区のオコナイの特色は、男性一人が化粧して華やかに女装し、お参りする際、提灯を持つトウニンと連れ添って歩くことにあります。呼び名の由来には諸説ありますが一説では、かつては嫁さん本人がお参りをしていましたが、「天気が荒れる時期に歩かせるのは気の毒」「道中ひやかされてかわいそう」といった理由から男性の代役を立てるようになったとのことです。

▶女装した男性がトウニンとともに神社へ参拝したところ

春 秋葉祭り（木之本町）

秋葉祭りは、木之本の伝統行事のひとつで、火難消除をはじめ諸々の災いからの御守護を願って、毎年3月18日に神輿渡行が区民総出で盛大に行われています。重さ1・5トンの神輿を担ぎ、町内を練り歩く150名余りの若い男衆の法被姿は勇ましいものです。各自治会には休憩する宿が設けられ、女性のみなさんがそれぞれの自治会でのもてなしに腕を振るいます。

また、この祭りが終わると湖北に春が訪れると言われています。

▲1.5トンの御輿を担ぎ、町内を練り歩く男衆

春 丹生茶わん祭（余呉町）

上丹生に伝わる茶わん祭は、末遠（現在の橋本）に陶器をつくる陶工がおり、その技を神から授かった報恩感謝の意味から丹生神社に陶器を奉納したのが始まりといわれており、古文書などによれば、室町時代から行われているようです。

山車を作る技術は、3基の山車を作る9人にのみ、代々伝わる門外不出の技で、3か月もの月日をかけて作り上げられます。

本来なら3年ごとに開催されるお祭ですが、近年では集落の人々の高齢化と少子化の影響でその間隔が長くなってきました。6年ぶりの開催となった今年は、多くの見物客があり、盛大なものとなりました。

▲集落内を練り歩く茶わんで飾った山車

春 長浜曳山祭（長浜市）

長浜八幡宮の例祭で、日本三大山車祭りの一つ。曳山は動く美術館とも言われ、その上で演じられる子ども歌舞伎が一番の見どころです。祭りは、役者だけでなく舞台方、御幣持ちなどを努める子どもたちや、中心となって祭りを運営する若衆、行事の取り決め等を行う中老たち等多くの人によって支えられています。

▲長浜八幡宮に奉納される子ども歌舞伎とそれに見入る多くの観光客

新市では、各地域に息づくこうした地域文化をみんなが再認識・再発見し、住民相互の理解や連携を深めながら、新しい地域文化を育んでいけるまちづくりをめざしています。そのためにもまずは、身の回りにある行事などに参加することから始めませんか。